

教育長 様

校番 32 沼南 高等学校長
(全日制 課程)**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和4年度 実施報告書****1 学校の教育目標等****(1) 教育目標**

家庭と農業に関する専門学科を有する高校として、学科間連携と実習や体験的な学習を通して、「地域産業の発展に貢献する人材」を育成する。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

自他を大切にし、社会人として必要な「対話力」を身に付け、地域と社会に貢献できる生徒である。育成を目指す資質・能力は「対話力」である。

(3) 学科等の特色

家政科、園芸デザイン科ともに、それぞれ県東部唯一の家庭および農業に関する学科である。

家政科は、豊かな感性、思いやりの心を大切に、生活関連分野のスペシャリストの育成を目指している。被服・食物類型と保育・福祉類型に分けた教育活動を展開している。被服・食物類型では、被服・食物の分野を体験的な学習を通して学び、確かな技術と生活をコーディネートできる生徒を育成し、家庭科技術検定三冠王(和服、洋服、食物調理1級)を目指している。保育・福祉類型では、保育・福祉の分野を体験的な学習を通して学び、福祉マインドを育み、地域社会へ貢献できる生徒を育成し、家庭科技術検定(保育2級)を目指している。両類型ともに日本語ワープロ検定、サービス接遇検定も受検している。

園芸デザイン科は約4haの広大な農場を擁し、作物栽培の体験的な学習を通して「食料・農業・環境」に関する知識と技術を学び、地域農業や地域社会に貢献できるスペシャリストの育成を目指している。園芸活用類型では、草花の栽培からフラワーアレンジメント、ガーデニングおよび園芸福祉活動への活用について学び、草花を通して豊かな生活を提供する力を身に付けることを目標にしている。園芸技術類型では地域の基幹作物であるブドウの栽培を中心に、各種園芸作物の栽培に関する知識と技術を習得し、地域農業の課題解決に積極的に取り組む姿勢を身に付けることを目標にしている。日本農業技術検定、フラワー装飾技能士3級、危険物取扱者試験、日本語ワープロ検定、小型建設機械特別教育講習、アーク溶接特別教育講習などの資格取得を指導している。

令和3年度から「総合的な探究の時間」の中で本校の農産物を使った学科間交流学習を展開し、「地域産業の発展に貢献する人材」の育成を目指している。今年度は1、2学年を対象に取り組んだ。

2 研究の概要**(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標**

家庭に関する学科と農業に関する学科の学習には食分野等の相互に関連する学習内容がある。これを課題発見・解決学習の材料とし、共通課題を設定し生徒が共同で作業し学習に取り組むことを通して、課題解決に向け探究する能力と態度を育成する。また、学習成果物を継続的に蓄積し、ルーブリックによる評価を行い、本校の育てたい生徒像に示した対話力の育成を図る。

(2) 2年後の目指す学校の姿

福山市域で唯一の家庭に関する学科及び農業に関する学科からなる専門高校として、地域産業や地域社会の発展に貢献することができる人材育成を目指す。実習等の体験的な学習をはじめとした職業人教育を通して、地域の企業が必要とする社会人としてのコミュニケーション能力や主体的に取り組む態度等の資質・能力を身に付けさせることのできるカリキュラムが構成されている。

専門高校としての強みを活かし、両学科が互いの学習成果物を共有しつつ学びを深めるなど、学科の枠を超えた連携が推進されている。地域と連携・密着した体験活動や、地域の特産品や行事などの地域資源を活用した交流活動、本校生産物の販売活動などを通して、地域や社会との接続の機会をより一層充実させ、地域に根差した学校となっている。

(3) 令和4年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- ・ 「総合的な探究の時間」と各教科・科目との関連を示すカリキュラム・マップが作成されている。
- ・ 学校として育成を目指す「対話力」についてルーブリックを作成し、教員による評価及び生徒自身による自己評価に活用し、生徒の学習状況を適切に評価することができている。

イ アウトカム（成果目標）

- ・ ルーブリックによる「対話力」の評価結果が目標値以上である生徒の割合が60%以上になっている。
- ・ アンケートの結果、「対話力」が向上した生徒の割合が70%以上になっている。

(4) 令和4年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

「総合的な探究の時間」・沼南キャリアⅡ

イ カリキュラム開発の概要

（マクロレベル）カリキュラム開発に先んじて、研究指定校の趣旨と取り組む内容をビジョン委員会で確認し、職員研修で再確認した。その上でマスタールーブリックの再検討を行った。さらに、核とするカリキュラムである「総合的な探究の時間」において研究授業と研究協議を行った。

具体的には6月に生徒の現状を踏まえて設定した育成すべき資質・能力、経営目標、育てたい生徒像、教育目標、研究指定校の趣旨と取り組む内容について、共通理解を促すため職員研修を実施した。マスタールーブリックは、検討の結果令和3年度に作成したものを引き続き使用することとした。11月に「単元テンプレート」について指導主事から研修を受けた。11月にはカリキュラム開発を促進し、対話力育成の実践を学校全体に広めるため、他校の学校魅力化コーディネイト力養成研修者にも参加して、核とするカリキュラムである「総合的な探究の時間」（沼南キャリアⅡ）で研究授業と研究協議を行った。これらの取組においては、大学教授より指導・助言を得て、魅力あるカリキュラムとなるよう検討を進めた。

（ミクロレベル）学校の教育目標や育成を目指す資質・能力の育成に向けて、「総合的な探究の時間」である沼南キャリアⅡを核として、生徒が各教科・科目等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活の中で総合的に活用できるようにするための「対話力」を育成するカリキュラムとなるよう検討した。

具体的には、本校の家政と農業の2つの専門学科である家政科と園芸デザイン科が連携し、本校で栽培している農産物を活用し、草木染を活用しながら、課題発見と解決方法を考える中で、よりよい「対話力」を実践的に身に付けさせる学習展開について検討し、9～12月にかけて計13時間実施した。

また、国語科では研究指定校事業における研究教科の指定を受け、取組みを行った。8月に指導主事から教科主任（全体）に対して指導と評価の一体化について指導を受けた。11月と1月に国語科は「単元テンプレート」と「シラバス」と「教材開発」について研修を受けた。

ウ 校内体制

既設のビジョン委員会を活用し、事業を推進した。

そのうえで、カリキュラム開発を全教員が参画して行うために、職員会議で全体への周知を行った。また、各教科・学科で取り組む内容について各教科会議で協議し、その内容を教科主任会議で共有し、それを踏まえてカリキュラムの見直し・改善を行っていった。生徒の学習状況の評価についても、必要に応じて各教科会議で検討した。

(5) 学習評価

核となるカリキュラムに関わる授業の前後に、生徒アンケート、ルーブリック評価を実施し、生徒の資質・能力の育成状況を見取り、その後の学習や指導の改善に生かせるよう工夫した。

(6) カリキュラム評価

開発したカリキュラムの内容や、カリキュラム実施後の学習評価、生徒の姿等をビジョン委員会で共有し、カリキュラムの妥当性を検証した。

3 令和4年度の成果及び課題

(1) 成果

- ・ 「対話力」のマスタールーブリックは令和3年度に作成したものを引き続き使用し、生徒自身による自己評価に活用した。核とするカリキュラムの中で、専門学科（家政科、園芸デザイン科（農業科））の特色を生かした学科間交流学習を1、2学年で実施し、継続可能な学習計画を作成できた。
- ・ カリキュラムの開始・実施前後の生徒アンケートの結果、聞く力は57.1%から60.5%に、伝える力は55.4%から57.5%に上昇し、目標値の60%に及ばない項目もあったものの向上が見られた。記述式アンケートによると複数の生徒から「マスタールーブリックの内容を意識してやろうとした。」という記述があったことから、対話力の重要性を考え意識させることができ、指導が有効であったと考えられる。

(2) 課題

- ・ カリキュラムの開始前後の生徒アンケートの結果、考える力は51.9%から47.2%に低下した。自分の考えをはっきりと把握する、学習活動の中で、自分の経験をもとに考える等の内容が薄いため、強化すべき課題である。
- ・ 核とするカリキュラムにおいては、より高度な「対話力」を目指し、教員から生徒への働きかけや生徒同士が互いに教え合う内容を具体化すること、課題を発見させるための内容を計画的に盛り込むこと、チェックシート、掲示、振り返りなどによりマスタールーブリックの活用の仕方を工夫することなどが課題である。
- ・ 「総合的な探究の時間」だけでなく、ほかの教科や学校生活のあらゆる場面で教職員・生徒共に「対話力」の育成を意識づける仕組みが必要である。

4 令和5年度の研究目標及び取組内容

(1) 令和5年度の研究目標

ア アウトプット（活動指標）

- ・ 「総合的な探究の時間」と各教科・科目との関連を示すカリキュラム・マップが作成されている。

イ アウトカム（成果目標）

- ・ 学校として育成を目指す「対話力」についてルーブリックを作成し、教員による評価及び生徒自身による自己評価に活用し、生徒の学習状況を適切に評価することができている。

(2) 令和5年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラム開発の概要

「総合的な探究の時間」を核として、生徒が各教科・科目等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活の中で総合的に活用できるようにするためにカリキュラム・マップを完成させ、学校生活のあらゆる場面で「対話力」を意識した学習活動が行えるよう工夫する。

また、引き続き家政科と園芸デザイン科が連携し、果樹、野菜、草花等の栽培、加工、商品づくりについて課題を見出させ、相互に教え合ったり、工夫し合ったりすることを通して、課題解決を目指し、その改善方法を考える中でよりよい対話力を身に付けさせる学習活動を充実させるとともに、自分の経験をもとに考える場面を増やす。

イ 校内体制

引き続きビジョン委員会を活用し、事業を推進する。

カリキュラム開発を全教員が参画して行うために、職員会議で全体への周知を行う。各教科・学科で取り組む内容について各教科会議で協議し、その内容を教科主任会議で共有し、それを踏まえてカリキュラムの評価・改善を進める。

また、生徒の学習状況の評価についても、各教科会議と連動しつつ検討していく。